『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

第四相「内住・常燃」

――第二部　人間の福音的実存七相――

２０２３年９月24日

弘野慶次郎

皆さんと讃美し喜びたい　本体と影像　神は農夫　内住　ザアカイの家に泊まる　十字架の門
ヨハネ伝第14章　結実　聖潔　万能の愛

●皆さんと讃美し喜びたい

おはようございます。僕はここへ来るのは、

「皆さんと讃美をしたい、喜びたい」

という、その思いだけなんです。それ以外は何もない。ヨハネ伝15章に、

「11**我これらの事を語りたるは、我が喜悦（よろこび）の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。**」（ヨハネ15・11）

とある。これは15章、16章、17章にも全部、

「あなた方が喜んでほしいために、喜びが溢れるために、私はこういうふうに語っている」

という言葉が書いてある。喜びというのは、子どもは3歳位までキャーキャーと喜んでいるでしょ。それを過ぎると、だんだん人間は喜ぶということを忘れていく。僕は、

「十字架というのは喜びの復活だ」

と思っている。「罪を贖う」ということはもちろん書いてあるけれども、

「罪を贖う」

ということは、

「幼児の喜びをもう一度回復してくださったのが十字架だ」

と思っている。本当に幼児を見ていたら分かりますよ。あの3歳位の幼児というのはもの凄く喜んでいる。あれは天国の喜びを、生まれたときは持っているんです。けれども、天国的な喜びは、自我が目覚めた頃にはすっかり忘れていて、喜んでいる人々はほとんどいなくなってくる。神さまは、主イエスという方は、

「あなた方は本当に天国的な喜びの中で生きてほしい」

という願いを持っておられると思う。ヨハネ伝のこの15、16、17章は僕は最近大好きなんです。こういうことが

「喜びをもう一回、回復してくださったんだ」

と思っている。

「あなた方を選んだのは私である」

と、はっきりこの15章に書いてありますね。僕は、

「小池辰雄の十字架の受けとり方というのは凄いから、これをもとから学び直したいな」

という思いがある。そして、

「皆さんと一緒に讃美をしたい、喜びたい」

という思いで、僕はここへ来ている。

「天国にある。神さまに在る」

ということは、何十年離れていても、何百年離れていても、やっぱり抱き合えて喜び合える仲間だと思っている。福音書を読むでしょ。ザアカイとか、バルトロマイとか、ああいう人たちがこの福音書に書かれています。僕は天国に行ったら、きっとそういう人にもまた抱き合って喜べるかなと思う。

僕はいろんな所へ行くんですよ。教会に行ったり何かしますけれども、結局、みんな主を喜んでいる人たちの集まりなんです。そういう人たちと共に喜びあうこと、讃美し合うことができたら、これほど嬉しいことはない。だから、小池辰雄だけが問題ではない。どこの集会へ行っても、本当に心から喜んでいる人がおられます。そういう人と僕は

「抱き合いたいな、一緒に讃美したいな、喜びたいな」

という思いが非常に強い。僕がここへ来るのも結局は、

「皆さんと一緒に讃美して喜んで、主をたたえたい」

というようなことが僕の思いなんです。むずかしいことは一切ない。

「主イエスだけをいただいて、それを讃美することができたら、喜ぶことができたら、それに越した幸せはこの世にはない」

と思っている。

僕はいつも、僕の言葉はもの凄く舌足らずで、どこまで人の心に伝えられているかわからないけれども、とにかく、そういう思いだけは人一倍持っているつもりなんです。「持っている」というか、神さまから来たんです。神さまの喜びが私のところに来ているから、そういう喜びが発露として出てくる。そういうふうな行き方を、皆さんがやっていただいたら、これほど嬉しいことはないという思いでおります。

●本体と影像

それで、今日は『無者キリスト』の214頁「内住・常燃」の「真の葡萄樹」というところを学びたいと思います。

《第四相　内住・常燃　真の葡萄樹（ヨハネ15・1～19）

本体と影像

「われはまことの葡萄の樹、わが父は農夫なり。」（ヨハネ15・1）

イエスは、自分がまことの葡萄の樹だという。それは例えば、私が机上に飾られてある菊の花を見て、「私が本当の菊の花です」というのと同じことである。それはちょっとおかしいではないかと思われる。「私はこの菊の花のようなものだ」というならわかるけれども。ゲーテの『ファウスト』第二部の最終の一段の詩句に

"Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis."

「すべてうつろいゆくものは影像に過ぎず」

というのがある。現世において我々が見、聞き、触れるこの移りゆく儚なきものは、影像、似姿にすぎない。本体界の本体がこの現象界に投影しているにすぎない、本体は彼岸にあるというのである。どんなに鮮やかに水に映っている鳥の影もそれは影であって、鳥は空を飛んでいる。プラトンもそういう角度から現象界を見ていた。

ところがイエスは、「自分が本ものの葡萄の樹」で、普通の葡萄の樹は影像だといわんばかりの語調である。イエスはまことに、天界のロゴス・キリストが、現象界にサルクス・キリストとして、受肉のキリストとして現象していたわけである。それで

「我はまことの（アレーティネー）葡萄樹なり」

といった。本体界の実在（エッセンシア）が現象界に実存（エクシステンシア）として投じ出でたということは、まことに

「日の下に新しきことなし」（伝道1・9）

という事態を破った新しきことであった。イエスの「我はまことの葡萄の樹」とはそういう事態の表現として実に重大な内実のものである。自然界の葡萄の樹は枯れることがある。けれどもイエスという葡萄の樹は枯れない。

これと同じ様なことをイエスはサマリヤの女に語った。即ちヤコブの井泉がどんなにすばらしい井泉であろうとも、ヤコブの井泉の水を飲む者はまた渇く。けれども私が与える「活ける水」を飲むものはいつまでも渇くことがないと。これはイエス自らがまことの井泉であることを語っていたわけである。即ち彼は霊泉で、その水は聖霊であることを示したわけであった（ヨハネ伝4章参照）。

これらはみんな、本体界の根源現実を現象界の現実をもって表現せんとしているわけなのである。イエスという人は、彼自身が、神を体現している神の「言」であり、神の「業」である。それゆえ、

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

といった。このような啓示的事実をどうしたら受けとれるかというなら、それは単なる理解でも、認識でも、研究でもない。信仰、信受、体受のほかあり得ない。聖書の

世界は信仰的応答、行為的認識によるほかはない。》

これをずっと読んだら、難しい言葉を羅列してあるので、凄く分かりにくいかなと思いますね。最初に、

「**われはまことの葡萄の樹（き）、わが父は農夫なり。**」（**ヨハネ15・1**）

と。小池辰雄は、この「われはまことの葡萄の樹」ということは、

「ここら辺にある僕らが見ている葡萄の木は偽りですよ」

ということを言っている。泉に対しても、そういうことで、

「本当の泉は私である」

というようなことを言っている。これは実は、葡萄の樹だけではないんです。

「真（まこと）の何々」

というのは全部、他のところでも言っている。「真の光」という。僕らは太陽の光を見ているけれども、あの太陽の光ではない、本当の光というのは、

「真の光というのは私なんです」

ということを言ってます。「生命」だってそうです。我々は生きているということで確かに生命はあるけれども、

「本当の生命は私なんですよ」

と言う。その当時に「空気」という概念があったら、「真の空気」も僕らが吸っている空気ではない。

「真の空気こそ私ですよ」

と言っている。イエスは、

「真の太陽、真の雨、真の空気、真の火、真の熱、真の愛こそ私ですよ」

ということを言っている。小池辰雄はいつも、

「イエスこそもの凄いとんでもない人だ、大変な人だ」

という表現を使っています。小池辰雄は十字架を受けとってから、

「キリスト・イエスという方がどれだけ凄い方か」

ということを認識されているから、こういう表現が出てくるのだと思う。「真の葡萄の樹」だけではない。

「本体界があって、その本体界だけが真であって、我々はそれをただ影として見ているだけだ」

というようなことが、ここに「本体と影像」という題になっていると思う。我々がつらつら触っているもの、我々の見、聞き、触れるものはすべてが移ろいゆく、影絵にすぎない。似姿にすぎない。

「本体こそが彼岸の世界、神の世界に在るんだ」

ということを強調して、小池辰雄は書いてくれている。

「本体は彼岸にある」
ということを強調している。その例として、あの『ファウスト』の句をここに出して、
「すべて移ろいゆくものは影像にすぎず」
という。我々は全部、影像を見ている。本当の光は、それはキリスト以外にはないんだということをここで小池は強調してくれている。
キリストこそ本当の人間なんです。我々は人間だと思っているけれども、我々は神さまを敵としたでしょ。だから、我々人間は本当の人間ではない。キリストが本当の人間なんです。
「本当の人間を回復する」
のが十字架なんです。小池辰雄は「伝道の書」から、
「日の下に新しきことなし」
という句を引いてくれてますけれども、
「日の下に新しきことなしという事態を破った新しきこと」
これが、
「イエスが受肉して人間になった」
ということです。これはとんでもないことですよ。神さまが人間の姿をとって、この地上に現れて、我々に語ってもらったということです。
「十字架で我々を贖ってくれた」
ということは、真に「日の下に新しきことなし」を破ったことなんです。だから、ここに
「日の下に新しきことなしという事態を破った全く新しき出来事だった」
ということをここで小池辰雄は強調している。
「イエスの「我はまことの葡萄の樹」とはそういう事態の表現として実に重大な内実のものである。」
と書いてます。たった二、三行ですけれども、小池辰雄が受けとった十字架の凄さを、
「とんでもない事が起こったんですよ」
と言っている。この世では常識的に生きていたら、本当に
「日の下には新しきことがない」
という現実をみんな思っている。だけれど、イエスがここに受肉したということです。
「天界の口ゴス・キリストが、現象界にサルクス・キリストとして、受肉のキリストとして現象していた」
と。天界のロゴス、天界の言、キリストが現象界に、我々の世界に、サルスク・キリスト（肉なるキリスト）、受肉のキリストとして現れたということが、
「とんでもないことなんですよ」
ということを、ここで小池辰雄は言っている。それが「本体と影像」というところの強調

したい小池の表現です。

井戸のことも出てきました。216頁には、

「これらはみんな、本体界の根源現実を現象界の現実をもって表現せんとしているわけなのである。」

と。本体界には、キリストは創造の前から居るということが聖書に書いてあります。歴史の始まる前からもうキリストが居られるということが聖書に書いてある。

「本体界の根源現実を現象界の現実をもって表現」

してくれたのがイエス・キリストなんです。肉をとってこの世に現れてくださったということが、どれだけ人間を愛したかということの表れだということになります。

「イエスという人は、彼自身が、神を体現している神の「言（ことば）」であり、神の「業（わざ）」である。」

と。神さまは我々を本当に愛して愛してやまないから、とにかく、神さまが人間の姿をとってきて、本当の人間として来られた。小池辰雄は、

「『ひと』というのは、霊が止（とど）まると書いて『霊止（ひと）』と訓（よ）むんですよ」

ということを教えてくれました。本当の人間にするのが神さまの望みです。キリストと同じ姿にするのが神さまの望みです。だから、とんでもないことなんですよ。

ここに何人か集まっていますでしょ。何人かここに集まっていることは、これもとんでもないことですよ。15章で読んでいただいたように、

「あなた方が私を選んだのではない。私があなた方を選んだのだ」

と。ここに居られる方は、一人ひとりが全くみな神さまから選ばれてここに居るんです。とんでもないことなんですよ。こういうとんでもないところに我々が導かれているということは凄いことです。

これは単純なことなんです。何も考えずに、幼児のような魂になっておりさえすれば、神さまの方から我々の中に入ってきてくださって、本当に生き生きと喜んで生きることができるということです。そういうことを小池辰雄はここで言いたいんだと思う。

「このような啓示的事実をどうしたら受けとれるか」

という。これは「啓示」なんです。どこの民族も、「彼岸」ということは知っている。「あの世がある」ということは知っているから、みな宗教が生まれたと思う。真の宗教だけは、神さまがイスラエルの民を選んで、啓示をされた。それを我々は、全世界に広がったその神さまの思いを受けとっている。仏教でもどこでも、

「極楽があります」

とか言うでしょ。けれども、キリストはその仏教をはるかに超えてますよ。仏教というのは観念的です。

「阿弥陀さんがおられます、何々がおられます」

とか言って、仏像なんかをたくさん造っているけれども、ああいうふうなものは実体がはっきりしません。「阿弥陀さん」と言われても、何かよく分かりません。何かありがたいような、みんながありがたいと思っているから、ありがたいように思うだけの話です。けれども実際は、本当の世界というのはキリストしかいないんです。

「このような啓示的事実をどうしたら受けとれるか」

と。仏教徒なんかは受けとれてない。本当のキリストの啓示の事実を受けとってない。

「それは単なる理解でも、認識でも、研究でもない。信仰、信受、体受のほかあり得ない。」

体で受けとる以外はないんですよと。そのためには我々が本当に幼い魂、子どもの魂になったら受けとることができるんですよということで、

「破れ、砕け」

とかいう言葉を小池辰雄は使っているでしょ。破れている人間、砕けている人間こそが幸いなんです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という言葉を小池辰雄は強調してますよね。

「福音とは何かと問われたら、『幸いなるかな、心の貧しき者』の一句を超えるものはない」

と、前に学びました。そのように我々は何も勉強する必要も何もない。本当に幼児みたいな魂になったら、そこに神さまが入り込んできて、神さまが支配してくださる。キリストが支配してくださる。それが天国ですよ、ということを言っている。

「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。天国とはキリストが支配してくださる世界が天国ですから、本当に幸いな魂、子どもみたいな魂が最も愛された魂、幸いな魂なんですよ、ということを言っている。ここで、

「啓示的事実をどうしたら受けとれるか……信仰、信受、体受のほかあり得ない」

という。これが幼児のような魂で信仰をもつ、

「幼児の魂でキリストの事態を受けとる、からだで受けとる」

その他にはありえないと。

「聖書の世界は信仰的応答、行為的認識によるほかはない。」

と書いているけれども、非常に難しいですね。

「信仰的応答、行為的認識」

と、こういう言葉を聞いても、分かるわけはないんですよ。これはかみくだいて言ったら、前に学んだように、

「幸いなるかな、魂の貧しい者」

なんです。

「魂が貧しくされた者が
それは十字架なんです
　我々を本当の人間に回復してもらっている本当の喜びの世界に、天国的な喜びの世界に入りこむことができるんですよ」
ということを小池辰雄は強調して言いたい。それをここでちょっと難しい言葉で表現しすぎなんです。だから、『無者キリスト』を読んでも分からない。この一冊を読んでくださいといって渡しても、絶対に分かりませんよ。これは
「誰にでも分かるように書いた」
と小池辰雄は言うんですけれども、とんでもない。これほど難しい表現の仕方はない。けれども、小池辰雄が言いたいのは、
「幸いなるかな、心の貧しき者」
なんです。心の貧しい、何もないということは、最もキリストを受けとるための条件です。子どものような魂こそが幸いなんです。
「勉強しました。研究しました。何々をしました」
と、そんなことではない。あるがままの世界に、あるがままにキリストに接したら、それが幸いなんです。それが
「幸いなるかな、心の貧しき者」
というあのキーワードです。あれが本当に信仰に入る最大の言葉だということを小池辰雄は発見してくれた。そういう発見をしてくれたから、僕は本当にこの小池辰雄の本を何とかして噛み砕いて、みんなに知ってほしいなという思いがある。
　小池辰雄は欠点だらけでしたよ。本当にいろんな欠点があるけれども、その中にキリストが入りこまれたんです。それがこの本になっている。あるいは講筵になっているんですけれども、その基は本当に、
「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」
というのがキーワード中のキーワードということです。それでここでは、
「理解でも、認識でも、研究でもない」
と。そんなものではない。勉強したからというのではないと。
「『幸いなるかな心の貧しい者』という状態で私を受けとってくださいよ」
という、その一句がここの最後の数行に書いてある。

●神は農夫

≪神は農夫

「わが父は農夫なり」。イエスにとって神は親しい父であり、聖なる霊であることは、同じくヨハネ福音書第４章のサマリヤの女との会話でわかる。ここでは農夫であると

いう。葡萄園を栽培する農夫のこと、葡萄園のことは、著しい例としてはイザヤ書5・1～7がある。また創世記9・20～27を見ればノアが農夫で葡萄園を作ったとある。その他葡萄は橄欖や無花果と共に聖書の所々方々に散見できる重要な植物であることは周知のことである。

農夫は季節や天候をわきまえ、土壌の成分性質を知り、環境地勢に順応していろいろ按配するすべを心得ている者。そのような農夫として神にイエスは全幅の信頼を置いている。≫

神は農夫である。

「わが父は農夫なり」

と。イエスにとって神は親しい父であるということです。そして、

「そのような農夫として神にイエスは全幅の信頼を置いている。」

という。イエスという方は、

「わが父、わが父」

と呼んでおられる。「神さま」という言葉は出てきますけれども少ない。全部、神さまのことを「わが父」と呼んでおられる。この「わが父」というような言葉で例をいいますと、イエスが洗礼を受けられました。その時に水から上がられたら、天の父の方から、

「私はお前を愛する。これに聞け」

という言葉が出てきます。天の声が聞こえる。また、イエスの姿が変わった、変貌されたところがあります。あの時も同じ言葉が書かれている。

「これは私の愛する子だから、これに聞け」

と。神さまの方から、イエスのことを

「私の子だ」

と言っている。だから、イエスは、「神さま」と言わないで、「わが父」と呼んでおられる。「わが父である」ということは、イエスの言葉に、

「雀（すずめ）一羽も神さまのゆるしがないと落ちない」

と言われてますね。それほど、神さまというのは、イエスを送られましたけれども、本当にすべての生けるものに慈愛を持っておられる。単なる無機的なものが宇宙とかいうものではない。神さまが宇宙を全部創られましたけれども、そういう無機的なものではない。神さまの本来の思いは、雀一羽にも愛情を持っておられるということです。だから、

「雀一羽でも神さまゆるしがなかったら落ちることはないんだ」

という、あの言葉に象徴されていると思う。

「わが父は農夫だ」ということで、「親しい父として」崇めておられる。そして、

「そのような農夫として神にイエスは全幅の信頼を置いている」

と。それは本当に人格関係です。「父と子」という人格関係で神さまを見ておられるという

ことがここで、

「わが父は農夫なり」

という言葉で、

「親しい父、全幅の信頼を置いた父」

ということなんです。

僕もここを読むまでは、やっぱり「神さま」という言葉を使って、「お父さま」とか「父」とかということは思わなかった。けれども、本当に親と子です。それと同じような信頼の関係で、これこそが本ものの親子なんです。我々は親子を見てますよね、親と子を。

「親は子どもを愛します」

ということが出てますけれども、これもまだ影にすぎないんです。本当の親と子の関係というのは、ここに出てくるように、「わが父」と呼ばれて、父の方から、

「これはわが愛する子だよ、このイエスに聞けよ」

と言っているでしょ。それと同じことで、親子関係も、我々が見ている親子関係は影にすぎない。本当に影にすぎない。実体は、神さまとイエスの関係なんです。それが本当の親子関係ですよ、と言っている。これは本体界のものが全部出てきているということです。だから、「神は農夫である」ということこと、「父は農夫である」ということは、

「それほど神さまとイエスとの関係が本当の関係ですよ」

ということをここで言っている。

我々の親子関係というのは、これも影にすぎない。親子関係でも、互いに憎み合ったりしますよね。父と子でも、憎み合ったりするけれども、そういうことはありえないんです、ここのイエスと神さまという父との関係においては。それこそ本当の親子関係なんです。我々の見ている親子関係というのはやっぱり影にすぎないということがここでも言えると思います。

あの当時、イスラエルは農業をしていた。その時に葡萄とか、オリーブとか、無花果ということが出てきますけれども、葡萄の樹が一番、我々にとって分かりやすいですね。

「私につながっておれよ、そうすると、お前たちは立派に実っていくんだよ」

ということを15章に書いてありますように。そういうことで、葡萄の樹がここで譬えとして語られたのだと思います。

●内住

《内住

「およそ我に在る枝にして果(み)を結ばざるは、父これをとり除き、果を結ぶものは、更に果を結ばんためにこれを潔め給う」（ヨハネ15・2）

本当に「キリストに在る」者なら、果を結ぶのは当然であるが、「キリストに在る」

という在り方が、観念的であるか、霊的であるかで、果を結ばぬか結ぶかにわかれることをキリストは語っておられる。葡萄の幹につらなっている枝でも、日あたりがわるかったり、虫に喰われたり、害虫が技の中にもぐりこんだり、風通しが悪かったりすれば、果を結ばないわけであるから、人間の現実でも、自分の信仰の在り方が、環境や運命や誘惑などでぐらついたり変ったりすれば、果を結ばぬことはいくらでもある。

「キリストに在る」ということが本ものであるとキリストの生命がはたらくから枯死することはない。そういう枝は果を結ぶから、キリストはいよいよ霊生をもって潔め給う。

「汝らは今や潔し、わが汝らに語りたる言に因りてなり。我に居れ。さらば我も汝らに居らん。技もし葡萄の幹に居らずば、自ら果を結ぶ能わざる如く、汝らもわれに居らずばまた然り。われは葡萄の樹、汝らはその技なり。我に居る者あらんか、我も彼に居らん。彼は多くの果を結ばん。我を離れんか、汝らは何ごともなし能わず。誰にてもわれに居らずば、技の如く外に棄てられて枯る。人々かれらを集めて火に投げ入れ、彼らは焼かるるなり。汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん。汝ら多くの果を結ばば、わが父これによりて栄光を受け給う。しかして汝らはわが弟子と成らん。父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。汝らわが愛に居れ！」（ヨハネ15・3～9）

以上のキリストの言には「居る」という語がたたみかけて出ている。原語「メネイン」は、あるものの中に「留まっている」、「宿っている」という意味の語であるから、枝が幹につらなって不可離のように、自分がキリストの中に宿ること、キリストがわが中に宿ることで、泊まり込む非常に生命的な親しみ深い言葉である。日本人にはよくつかめる事態である。信仰とはそのようにキリストの生命の中に宿り、泊まり、住むことで、常住的な事態である。》

この「内住」ということで、「キリストに在る」という言葉を、

「以上のキリストの言には「居る」という語がたたみかけて出ている」

とありますが、今読んでもらったところでも

「居る」

という言葉が10回も出てくるんです、数えてみたら。このところは凄く分かりやすいですね。

「葡萄の樹にしがみついておれば、必ず甘い実になりますよ」

ということを言っている。枝々があって、それからいろんな葡萄の房が出てきます。それが横の繋がりで、この葡萄の樹の中であの人とこの人が一緒になって、一つの群れを作っていくということです。ですから、この

「在る」
ということと、
「あなた方は枝である」
ということが非常に我々の人間関係も表している。これほど分かりやすい譬えはないと思う。本当にしがみついておれば、とにかく、
「枝でそこで居りさえすれば、あなた方は実を結ぶんだ」
という、分かりやすい言葉です。そして、互いにあっちの実、こっちの実が一緒になって、一つの教会をつくる。一つのエクレシアをつくる。一つの群れをつくるというようなことで、これは非常に分かりやすい譬えだと思って感心するくらいなんです。ただし、
「環境や運命や誘惑などがあるから、なんぼ繋がっておっても、果を結ばないこともあります」
ということもここでちゃんと書いてくれている。それを農夫はちゃんと導いてくださるんですよ、ということも書いてくれています。でも、我々は何とかして、本当にキリストに繋がっておれば、これほどいいことはない。ただし、いろんな環境とか何かですぐ誘惑されて、ここから離れていこうとする。これが大部分のクリスチャンではないかなと、僕は思っている。やはり、クリスチャンというのは、きちっと枝に繋がっておって、環境や運命に左右されない生き方をしたいなと思いますね。
「自分の信仰の在り方が、環境や運命や誘惑などでぐらついてしまう」
と、これも小池辰雄は、注意しなさいよということを言ってくれてます。
「キリストに在る」という在り方はどういう在り方かということを、ちょっとここに書いてくれています。生命的な、
「自分がキリストの中に宿ること、
「宿る」という言葉をまた使っていますね。
キリストがわが中に宿ることで、泊まり込む非常に生命的な親しみ深い言葉である。
……信仰とはそのようにキリストの生命の中に宿り、泊まり、住むことで、常住的な事態である」
と。「在る」「宿る」「泊まり込む」という親しい言葉であるということを書いてます。その他に、「泊まり、住む」ということが、「居る」ということなんですね。「住む」ということは一緒に生活するということですから。これは小池辰雄が、
「何々に居れ、繋がっておれ、宿れ、住むとは「一つである」ということ」
を言ってくれている。

●ザアカイの家に泊まる

前回、ザアカイのところでも、

「私は今日、お前の家に泊まるんだ」
ということを学びました。そのときに、「泊まらざるを得ない」ということを言ってます。
209頁の、「泊まる」とか「居れ」ということをもう一度学んでみたいと思います。
《「私は今日、あなたの家にきっと泊まるよ」は「泊まらざるを得ない」であるように、
ルカ13・33の
「今日も明日もその次の日も、私は進み行かざるを得ない」
である。ルカ24・29ではエマオへの旅人たちが復活のイエスに
「私たちと一緒にお泊まりください」
といっている「泊まる」と同じ語であり、ヨハネ15・45の
「私につながっていなさい」
も、場合によっては
「私のもとに泊まりなさい」
といって可い語である。そのようなわけで、キリストの愛の迫りは泊まりとなると申して可い。ペテロもヨハネもパウロも聖霊を受けてからは、み霊のキリストをふところに迎え入れ、泊まっていただいた人たちであった。キリスト者とは何か。キリストをうちに宿している者である。ロマ書8・9にも原語は少しちがうが、
「み霊があなた方の内に宿っているなら」
とあり、
「キリストのみ霊を持たない人がいるなら、その人はキリストの属ではない」
と同節でパウロは明言している。どんなに聖書の研究ができており、神学的に理解できていても、現に十字架の贖罪にあずかり、み霊のキリストを宿していないなら、これは聖書がいうところのキリスト者ではない。み霊が宿っていなければ、キリストの生命がないからである。パウロが
「キリストわが中に」
「われキリストの中に」
という消息を書翰の中で百回以上も語っているのは、この現実である。》
これはこないだ学んだことです。ザアカイの家に、
「今日は必ずあなたの家に泊まらざるをえない」
ということです。この「泊まらざるをえない」「居らざるをえない」というのは、
「我々がキリストに繋がっておりなさい」
と言っているけれども、向こうの方から
「私はお前に繋がらざるをえない」
ということなんです。神さまの方が主体なんです。
「私はお前の家に泊まりたいんだ。もう泊まらざるをえないんだ」

と。だから、葡萄の樹のあそこでも、
「私に居れ、私に繋がって居れ」
と、「居れ」とか「宿れ」とか言ってますけれども、
「向こうの方から居らしてくださる」
ということでしょ、ここを読むと。だから、「泊まる」とか「宿る」とかいうのは、向こうの方から、神さまの方から
「繋がりたいんだよ」
と言っている。だから、
「私にどこでも繋がっておりなさい」
ということ。向こうの方が「せざるを得ない」という状態なんです。キリストの方がザアカイの家に泊まりたい。キリストの方が泊まりたいわけです。ザアカイは泊まっていただいたら嬉しいから、
「あっ、泊まってください！」
と言うわけです。そういう関係です。あの葡萄の樹と我々の関係も、枝との関係も、向こうの方が、
「お前と繋がらざるをえないんだよ」
というのがまず先にあって、
「あっ、だから私もあなたに繋がっています！」
という、向こうの方があなたに繋がらざるを得ない、ということ。
「繋がりたいんですよ、あなたに。あなたに繋がりたい、だから、私に繋がっておれよ」
ということなんです。ヨハネ伝15章に、
「私に居れ、私に居れ」
と書いてありますが、それを繰り返して言われても、「自分で何か居らないといけない」と思うような、自分の方からではない。神さまの方から、
「私はお前に繋がっているから、お前も必ず繋がっていなさいよ」
という、向こうの方が主体です。ザアカイのところを読んでいただいたように、向こうの方の意志が我々に伝わるから、我々が
「はい、そうですか。そうします！」
というのが信仰なんです。そういうことをこの「内住」というところで学ばないと、これをそのまま読んでいると、「自分が繋がらないといけないんだな」という思いになってしまう。そうじゃない。向こうの方が主体です。向こうの方が繋がっていたいから、
「はい、分かりました。私はあなたに繋がっていますよ」
ということがここで言われている。

このザアカイをもう一度読んでみましたけれども、内住とか、住むとか、繋がるということは、本当にあちらからの話なんです。それを虚心な気持ちで、

「あっ、そうですか」

ということ。赤ちゃんは母親に抱かれている時に――母親が抱きたいんです――そうしたら、

「ああうれしい」

と思って、子どもがその母親の胸の中でおると同じなんですよ。向こうの方が、母親の方が愛しているわけでしょ。そしたら、子どもがそれに応えて、

「それなら、そこへ行きます」

という、葡萄の樹の関係も結局そういう関係だということです。

●十字架の門

《それではそれはどのようにして可能か、ということになると、どうしても深い祈りを要する。祈り入ることを要する。祈りとはおのれをキリストの中に投じ入れることである。それはどうして可能か。それはキリストの門を通ることを要する。キリストの門とは何であるか。それは十字架という門である。こういう漢字はないが、門構えの中に十の字を書いたらはっきりするだろう。十字架は罪のわれを無条件にゆるして通らせてくださる門である。

「われは門なり」

とはそういうことだと私は思っている。平伏して無条件にこの門を通らせていただくと、その先は聖霊の気の漂うすばらしい「緑の野べ」、「憩いの水ぎわ」で詩篇第23篇さながらの現実である。すなわち、わが首（こうべ）に聖霊の油がそそがれ、われという杯は聖霊の水であふれるのである。このように、十字架を真に受けとると、必然、聖霊のバプテスマにあずかることになる。これを祈りにおいて深く体受することである。聖霊を賜わらずして、

「我キリストの中に泊まる」

とか、

「キリストわが中に泊まる」

とか、申しても、それは空言にすぎない。観念的な信仰ではこの霊的な現実は本ものとならない。

ペンテコステにおいて弟子たちや女どもが一団となって心を合せ、ひたすら祈り続けていたところに聖霊が臨んだように、心を合せて祈る群に聖霊がのぞむ場合が多い。それでキリストがここでも「汝ら」といって複数で語っておられるわけである。エクレシア（召団、召されたる者たちの群、普通「教会」と訳しているが）とはそのように聖

霊をうけた群のことであることを銘記すべきである。歴史的にはそのようにキリストを首（かしら）とし、聖霊を受けた群を体（からだ）とした構造の自覚で、この体がエクレシアである。それで「われキリストの中に」という個的な自覚が同時に、我らは互いにつらなる枝であるという連帯性と一体になっている。愛はこのように、縦と横との両面をもっているから、キリストが、神を愛することと、隣人を愛することとは一つだと言明している所以である。勿論、聖霊を受けるということは深い祈りにおいて個的にも体験できるが――預言者も使徒もそういう場合があった――聖霊は必ず愛としてはたらく霊である。

かくてキリストとの交り、内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。聖霊は火にもたとえられる。天来の愛の火であるから、この火はいかなる人生のあらしにも消えない、祈りをもって神・キリストと交っている限り。内住の霊、常燃の火として聖霊を有（も）つことは実存の最も中心の事態である。》

これを読んだら、だいたい分かるかと思う。その「泊まる」とかいうのが、どうやったらできるかということをここで言っている。

「それはキリストの門を通ることを要する」

ということを言ってくれている。

「十字架は罪のわれを無条件にゆるして通らせてくださる門である。」

この十字架というのは本当に無条件のゆるしなんです。我々が何か持って行って、キリストのところへ来るのではない。あるがままの姿で、無条件のままでキリストのところに行く。それが十字架なんです、無条件に。

無条件、これがもの凄く大切なんです。条件は絶対に付けなくていい。無条件に赦して通らせていただく。まるで子どもと同じなんです。子どもは母親のところへ、自分が悪いことをしたとしても、母のところへ行くでしょ。あれと同じなんです。善いとか悪いとかとは全然関係ない。もうそのまま、あるが姿のままで、子どもというのは母親のところに抱かれています。おしっこしても、うんちしても、そのまま抱っこしてくれるのが母親でしょ。それと同じなんです。我々は本当に無条件、もう全く何も条件は抜きですよ。これをもの凄く強調しておかないといけない。

何か自分で条件を付けて、神さまのところへ行こうとする。それはイスラエルの民がやったことですよ。

「こういうことをしたら、神さまに喜ばれる。こういうことをしなかったら、神さまに喜ばれる」

というのがイスラエルの民だったんです。それをキリストが

「全く無条件でお前を赦す。無条件で私はお前のために死んだんだよ」

ということをここで言っている。無条件に赦して通らせてくださるのが十字架なんです。

この十字架というものは本当に難しくない。これを難しくしているのが我々の自我ですよ。もうそういうものではない。本当に無条件のままキリストのところへ行けばいい。それが、「キリストの門を通る」ということなんです。

平伏して無条件にと。この「平伏す」こともできないのが人間ですよ。砕け切れないのが人間なんです。本当に平伏すことさえできないのが人間だから、それをそのまま無条件に持っていけば、詩篇23篇のように、

「緑の野べ、憩いの水ぎわ」

に我々を連れて行ってくださるということです。そうすると、

「わが首に聖霊の油がそそがれ、われという杯は聖霊の水で溢れるのである」

と。ヨハネ伝15章、16章、17章には、「喜びが溢れる」と書いてますよ。

「聖霊が川となって腹から湧き出る」

と書いてあるでしょ。

「溢れて溢れて仕方がないんだ」

というような表現を使ってますよ、ヨハネ伝では。我々は腹の中から聖霊が湧き出ている、溢れ出ると。我々は小さいカップに過ぎませんよ。けれども、そこに聖霊の油が注がれると、それはもう溢れて溢れて、泉のように溢れてといくという情景を想像してほしい。そういうふうなものが、

「わが首に聖霊の油がそそがれ、われという杯は聖霊の水であふれるのである」

と書いてます。ヨハネ伝では、「溢れる」とか「湧き出る」とか「枯渇しない」というような言い方をしてます。

「十字架を真に受けとると、必然、聖霊のバプテスマに与ることになる。これを祈りにおいて深く体受することである。聖霊を賜わらずして、「我キリストの中に泊まる」とか、「キリストわが中に泊まる」とか申しても、それは空言にすぎない。」

泊まるとか、宿るとか、住むとかいうのは聖霊を賜らずしてはない、ということを言っている。ここで聖霊の大切さを書いている。

「観念的な信仰ではこの霊的な現実は本ものとならない。」

観念的な信仰ではない。

「観念的か、霊的か」

ということを書いてますけれども、観念的というのは、御霊が来ていないことが観念的なんです。「観念的な信仰」といいますけれども、聖霊が来なかったら、これは信仰とはいえない。むしろ、「キリストに在る」というのは、観念的か霊的かということになると、霊的であって、これは非常に具体的なものです。観念的というのは、具体性がなくなるということです。

葡萄の樹の譬えと同じように――これはもの凄く分かりやすい譬えでした――けれども、

分かりやすい譬えは、キリストは、「食べる」とか「飲む」とかいう言葉で言っておられる。

「私を食べ、私を飲め」

と言っているでしょ。ああいうのは赤ちゃんでも分かりますよ。赤ちゃんでも、「飲む」とか「食べる」とかいうのは一番根源的なことでしょ。そういう単純な言葉で、「食べ、飲め」と言っている。

「私を飲みなさい、私を食べなさい」

と言っているでしょ。これは子どもでも分かる言葉なんです。霊的ということは、観念とは対立するから、「食べる」「飲む」という単純な譬えで言ってくださっているでしょ、キリスト・イエスは。本当に具体的に飲む、食べるということなんです。「宿る」ということも「住む」ということも非常に分かりやすい。これは子どもでも分かりますよ。

「一緒に住みましょう。一緒に食べましょう、一緒に飲みましょう」

と書いたら、子どもでも分かります。その子どもでも分かるような、もの凄い分かりやすい言葉でイエスは言ってくださっているんだけれども、いかんせん、大人になると、そういう単純な言葉を忘れていくんですね。

「宿る」という言葉で、これは女の人だったら分かると思うけれども、

「子宮の中に子どもが宿る」

とか言うでしょ。あの言葉は、日本では「宿る」という言い方をしてますよ、子どもが出来た時に。子どもが「宿る」という、ああいう具体的なものなんですよ。そこからオギャーといって、本当に人間が生まれてくる。そういうことでしょ、子どもが宿るということは。この「宿る」という言葉、「住む」という言葉は非常に具体的で、新しい生命を産むということにつながっていく。そういうことが、「観念的か、霊的か」ということの違いなんです。そこにやはり聖霊の賜物がなかったらいけないということです。さっき読んでいただいたように、ガラテヤ書2章20節のパウロの言葉ですね。

「現に十字架の贖罪にあずかり、み霊のキリストを宿していないなら、これは聖書がいうところのキリスト者ではない。み霊が宿っていなければ、キリストの生命がないからである。パウロが「キリストわが中に」「われキリストの中に」という消息を書翰の中で百回以上も語っているのは、この現実である。」

百回以上も語っているんですね。僕は知りませんけれども、そう書いているから、それだけ語っているんでしょうね。これはパウロだけが言っているわけではない。イエスが十字架にかかる前に繰り返し、

「私に居れよ、私のうちに居れよ」

ということを言っている。

●ヨハネ伝第14章

ヨハネ伝14章にも、「うちに」ということが書いてある。

ヨハネ伝第14章

「1『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2わが父の家には住処おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処を備えに往く。3もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4汝らは我が往くところに至る道を知る』5トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、いかでその道を知らんや』6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。11わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大いなる業をなすべし、われ父に往けばなり。13汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15汝等もし我を愛せば、我が誡命を守らん。16われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21わが誡命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』22イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』23イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に来りて住処を之とともにせん。24我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の

言なり。

25此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。27われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。28「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大いなるに因る。29今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信ぜんためなり。30今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に対して何の権もなし、31されど斯くなるは、我の、父を愛し、父の命じ給うところに遵いて行うことを、世の知らん為なり。起きよ、いざ此処を去るべし。」

この14章で、弟子たちが

「父を示してください」

ということを言うわけです。

「私を見た者は父を見たのだ。なぜ、そういうことを聞くのか。私が父のうちに居り、父が私のうちに居られることをどうして分からないのか。私が父の中に居り、父が私の中に居る」

ということを言われて、

「かの日には、やはり私が父の中に居り、あなた方が私の中に居り、私もあなた方の中に居る」

というようなことを繰り返し繰り返し言っておられる。ここでも結局、

「一つになってほしい」

ということです。

「神さまとイエスが一つである」

というように、

「私を見た者は父を見た者である」

と。その中には、

「私は父の中に居って、父も私の中に居る。あなた方も同じですよ。あなた方も私の中に居り、私もあなた方の中に居るんだ」

というようなことを、十字架にかかる前にちゃんと約束してくださっている。

「助主を、御霊を送りますよ」

ということを約束してくださっているんです。そして、

「御霊がくると、あなた方は私の中に居り、私があなた方の中に居る」

という。でも、我々はまだ不完全ですよ、この世に生きている間は。だから、

「かの日には完全にそういう状態になりますよ」

と言っている。我々が生きている間はまだ不完全です。

「私の中にイエスが居って、イエスの中に私が居る」

というのは不完全です。死ぬまでは不完全ですよ。しかし、

「完全に一つになる時が来ますよ」

ということを言っている。パウロも、

「自分が全部分かったわけではない。ただ本当にそういう状態になりたい」

ということを言っている。パウロでさえも完全ではなかったというような告白をしてます。本当の日がきたら、完全に一つになる。パウロは生前は、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

というようなことを言ってますけれども、それでも今は不完全である。我々は不完全なんですけれども、その将来のことは、やはり喜びが溢れてきたりして讃美をすれば、

「そのうちに将来は完全に一つになるんだ」

ということが分かるように、ここの14章でキリストが言ってくださっているわけです。

また、219頁に戻ります。ここは群れのことが書いてあります。個的にも一人ひとりがキリストに贖われて、喜びになるけれども、それと同時に、

「個的な自覚が同時に、我らは互いにつらなる枝であるという連帯性と一体になっている。

これは葡萄の樹の譬えで分かりますね。

愛はこのように、縦と横との両面をもっているから、キリストが、神を愛することと、隣人を愛することとは一つだと言明している所以（ゆえん）である。勿論、聖霊を受けるということは深い祈りにおいて個的にも体験できるが、」

必ず横との連帯があるんですよ、ということを言っている。連帯がなかったら、独りで喜んでいたら、これはダメなんです。やっぱり、みんなで喜び合うということが非常に大切です。それが連帯ですよね。最後に、

「内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。」

と書いてます。聖霊の現実がなかったら、これは絵に書いた餅で、観念になってしまいますよ、ということが書いてある。そして、

「内住の霊、常燃の火として聖霊を有（も）つことは実存の最も中心の事態である。」

内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは、生きる上で最も大切で、常に住んでもらい、常に燃えていることが非常に大切ですよ、ということをここで言ってくれている。

●結実

《結実

さて葡萄の根幹から枝葉に流れてくる樹液のように、人体においては心臓から血液が流れてくる。そして「血は生命のあるところ」とされている（創世記9章）。そのように、キリストの生命は、霊生で、聖霊のもつ生命である。であるから、み霊を宿してキリストとつらなるとき、謂わば霊血があるわけで、これが果を結ぶ源である。聖霊が結ぶ果は、パウロがガラテヤ書5・22で語っているように、「愛、喜悦、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」等である。また聖霊の賜物としては同じくパウロがコリント前書第12章で挙げている如く、「智慧の言、知識の言、信仰、病を医す賜物、霊能の業、予言、弁霊の力、異言、異言を釈く能力」等である。要するに聖霊はキリストに宿っている霊で、福音の原始核の如き驚くべき霊で無限無量の内実があるので、各個人の文化文明の健全な実存的ないとなみの原動力であることを銘記すべきである。20世紀の文化文明は、この聖霊をもつ福音乃至高次な宗教を根底にしない限り、非常に危いと言わざるを得ない。》

この「結実」のところはガラテヤ書で書いてくれている。パウロが「聖霊の実」ということで、

「聖霊が結ぶ果は、……「愛、喜悦、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」等である。」

これは難しいことは言ってない。「愛、喜悦」から始まる。御霊に在る時は――御霊に在るというから十字架を通ったキリストの御霊です――贖われた喜び、それから復活の永遠の生命をもらうという喜び、そういうものをパウロは

「愛、喜悦、平安……」

と言っている。これは自分からは出てきません。天国的な喜びなんて、自分からは絶対に出てこない。

喜んでいると、「平安」が来ます。それから人に対して「寛容」にもなります。「仁慈」も出てきますよ。喜びがなかったら、こういうものは出てきません。

「善良、忠信、柔和、節制」

と書いてくれているけれども、「愛、喜び」の中に全部含まれているんです。自ずとこれは出てくる言葉です。決して自分から

「天国的な喜び」

なんて絶対に出てこないですよ。「愛、喜び、……」といろいろ書いてますけれども、「愛、喜び」の中から「平安、寛容、仁慈、善良」というものが出てくる。賜物としては、

「智慧の言、知識の言それから信仰」

も入ってます。信仰も御霊の賜物なんですよ。

「病を医す賜物、霊能の業、予言、弁霊の力、異言、異言を釈く能力」

と、いろんなことが書いてますけれども、
「予言、異言、異言を釈く能力」
とか、そんなのは特殊の人しかありません。けれども、
「愛、喜び、平安」
というのは、どんな平凡な人間でも絶対くることです。そういうことがあると、これこそ無限の喜びということです。
「無限無量」
という言葉を小池はよく使いますけれども、これが中心です。「愛、喜び」、そういうところにくると――異言を解く力とかいうものは特殊な人はそういうことを持つかもしれないけれども――我々は単純に喜んでおればいいというようなことだと僕は思っている。あまり難しいことは僕は分からないからね。

●聖潔

《聖潔

キリストが「潔める」ということを言った。アンドリウ・マーレーの注解によると、この場合、旧き枝を相当深く技もと近いところから切り落とすことと類比の意味の由。柿なども枝をよく払わないと結実しがたい。信仰もつねに新たに旧き自分を切り棄てて進むを要する。信仰の事態で私心は禁物、無私の無が大切。しかし自ら潔まろうと、おのれの実存そのものを問題にしていると苦しくなる。所謂「潔め」派的な角度になっては、キリストの十字架は空しくなる。贖罪の血によって既に潔められているのである。「わが語りたる言」を端的に信受することによって「今や潔い」のである。》

「信仰もつねに新たに旧き自分を切り棄てて進むを要する。」
と書いてあるけれども、その時に、
「自ら潔まろうと、おのれの実存そのものを問題にしていると苦しくなる。」
自ら潔まろうという意識があると、そういうことを問題にすると苦しくなると書いてある。「自分で潔める」ということなんかとんでもないことです。この「潔め」という言葉が何か信仰的な言葉になってますけれども、キリストに在ればそのままもう潔められているということなんです。
「自分が潔くなろう、自分で光ろう」
とか、これは出来ません。蛍ではあるまいし、我々は自分で光ることはできない。光はもらわないと光ることができない。喜びも、天国での喜びがこないと喜べない。潔めもそうです。向こうからのキリストが潔いから、我々は潔くなっていくということです。自分からは、絶対に潔くなったり光ったりすることはできない。だから、あるがままなんですよ。平伏すこともできない、砕けきることもできないから、あるがままキリストのところに行

くというのが十字架です。自分で何かしようとしたら、もうこれは苦しくなります。何でも苦しくなります。自分で何かしようと思うと、これは苦しくなるから、そのままの姿でキリストのところへ来たら、「オーケイ！」と言われるというのがキリストの世界です。

《「永遠の御霊により、瑕（きず）なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に仕えしめざらんや」（ヘブル9・14）

である。

「まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許りと思うか」（ヘブル10・29）

という聖言が確言している通りである。

キリストに躓いた祭司、律法学者、パリサイ人、サドカイ人たちは果を結び得ず、キリストに平伏し、泣き、叫び、しがみついた取税人、遊女、罪びと、病者、不具者たちは、まずイエスに救われ、やがて十字架の贖罪による潔めと聖霊による聖なる熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えることができたにちがいない。》

福音書に書かれています。遊女、罪びと、病者、不具者、取税人、そういうのはイスラエルの世界から除け者にされていたような人たちです。そういう人たちが、泣き、叫び、しがみついた。そうすると、イエスはそれをよしとして、病を癒されたりしましたけれども、やがてそういう人たちも、

「十字架の贖罪による潔めと聖霊による聖なる熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えることができたにちがいない。」

ということなんですね。福音書に出てくるのは、まだキリストが十字架にかかられる前ですけれども、そういう人たちはキリストに出会って、もの凄く喜びました。ザアカイもそうでした。バルトロマイもそうでした。もの凄く喜んでいます。けれども、あの十字架を通ったあとは本当の、

「熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えたにちがいない。」

と。あそこは、キリストに出会いましたけれども、まだ百％喜びには行っていなかった。十字架を通って初めて本当の御名を讃えることができたというようなことを、小池が書いてくれているということです。

●万能の愛

《万能の愛

キリストが、上掲の如く、

「我を離れんか、汝らは何ごとをもなし能わず。……汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん」

と言っているように、み霊に在ってキリストに内住することをやめたら、霊的な力がなくなるから、本当のことができなくなる。またキリストの言は霊言で、聖霊と共にある言葉であるから、キリストの言葉が泊まるということと、み霊が宿るということは不可離である。それ故に聖言がわがうちに泊まっていると、力があるから、望むことが成ってゆく。キリストの言は万願成就を約束するかの如くである。こちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。けれども現象や結果を問題にしてはならない。どう現象しようが、結果しようが、み霊に在っての悲願は根源現実において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。み霊にある祈りの力はそこにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。≫

「キリストの言葉が泊まる」ということは、

「御霊が宿る」

ということと同じことです、これはもう不可離です。御霊が宿っていることが

「キリストに繋がっておる」

ということですよという。

「こちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。」

我々の願いが「悲願」です。その悲願は、人間の悲願なんて知れていますよ。けれども、それゆえに、「本願」、神さまの願い、神さまの愛が、神さまの本当の生命が、我々を本当に包んでいくということです。こちらの悲願はそれ以上の、それをはるかに超えた本願によって包まれていく。神さまの方が包んでくださる。我々の願いとか、それは知れてますよ、大したことないんですよ。けれども、

「我に居ったら何でも願いなさい」

と書いているでしょ。何でも願っていいんですよ。

「病気を治してください」

でも何でもいい。もう全然トンチンカンな願いでもいいんです。神さまに祈って、それをあれしてくださいとか、結婚したいなら結婚したいとか、何でもいいですよ。

「そういう人も願ったらこれは成りますよ」

と言ってくださる。ところが、

「その結果は問題にしてたらダメですよ」

ということも小池辰雄はちゃんと言ってくれています。けれども、

「キリストに在ったら何でも願いなさいよ」

と言う。僕はちょっと頭が痛い時も、

「頭痛を治してください」

と祈ったら、治るんですよ、本当に。けれども、治らなくてもいいんです、別に。本当に

人間のしょうもないことを祈ったらいいんですよ。それが

「あるがまま」

ということでしょ。あの赤ちゃんというのは、そういうふうなことで生きてますよ。母親に「ここが痛い」といって泣いてしがみついて行くでしょ。それと同じなんです。それで別に頭痛が治らなくてもいいんです。

「包まれるだけで、もうそれ以上の本願がなっていく」

ということをこう言っている。

何でも願ったらいい、祈ったらいいんですよ。けれども、その結果を問題にする以上に、もっと豊かなもの、もっと大きなものを下さるから、それで包んで行かれるから、

「もうそういう小さなことは気にしなくてもよくなる」

ということなんです。その結果を気にしないということは、

「その結果なんかどうでもよくなっていく」

というようなことです。それが

「結果を気にするな」

ということなんです。それこそ神さまの願いの方が大きすぎるから、我々がちっぽけな願いを――祈ってもいいです――祈っても、

「それ以上のもので包まれますよ」

ということをここで小池辰雄は言ってくれている。

「悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。」

それを

「無限無量」

と言っているんですよ、小池辰雄は。もう限りのない生命、限りのない愛ですよと。

「キリストの愛の広さも長さも高さ深さは本当に限りない」（エペソ3・18）

ということをパウロも言ってくれているでしょ。パウロも無限無量の愛ということを知っていたわけです。

小さいことでも何でもいいから祈ったらいい。そしたら、「もの凄く包まれている」ということをここで言ってくれている。

「悲願は根源現実において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。」

向こうの世界では、もう絶対に人間をないがしろにするということは有り得ない。一人ひとりがもの凄く大切な存在だから、それを放ったらかしにすることは絶対有り得ないので、あちらの世界では成っていることが本当に確実である。

「もう希望を持って生きていけばいいんですよ」

ということを言う。

「結果を気にしてたらダメですよ」

ということを何べんも言っている。

「み霊にある祈りの力はそこにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。」

と書いてある。「我々は幸いだ」ということを、我々は思っていますけれども、これは神さまの栄光の現れです。最後は神さまの栄光なんです。現れる神・キリストの栄光の場に我々は喜んだり何かしたらいい。これは神さまの栄光のゆえなんです。僕は新しい世界なんて知りませんよ、死んでないから分からないけれども、すべて自分が喜んでいるというのは神さまの栄光です。キリストの栄光なんです。それを現している。我々が喜んで生きていたら、神さまの栄光を現しているわけです。どんな小さいことでも、本当にちょっと光っているような、神さまの光があったら、それが神さまの栄光なんです。決して我々のものではない。神さまの栄光のために我々が居るということです。

《「**父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ**」（ヨハネ**15・9**）

という言葉は聖書の中で極めて重要な聖句の一つである。イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。信ずるということは愛するということと一つのことである。信愛一如、愛信一体なのである。神がイエスに

「われ汝を愛す、汝を悦ぶ」

という声を降し給うたのは、ヨルダンでイエスが聖霊のバプテスマを受けたときであった。父の愛をみ霊において受けたキリストは、同じみ霊の愛を以って弟子どもを愛し抜いた。だからいよいよ

「わが愛に留まって居よ！」

と言った。ということは、み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。そしてその愛はまたおのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。》

この最後の方に小池辰雄が結論を言ってくれてます。

「キリストは、同じみ霊の愛を以って弟子どもを愛し抜いた。だからいよいよ「わが愛に留まって居よ！」と言った。」

イエスは弟子共を愛し抜いた。キリストは我々を愛し抜いてくださった。だからいよいよ、

「わが愛に留まって居れよ」

という。向こうが愛してくださったから、

「はい、ありがとうございます、その愛に留まっています」

ということなんです。さっきのキリストが、

「私はお前に宿るから、私がお前につながっているからあなた方も私につながれよ」

というのと一緒です。ここに書いてますね、キリストが、

「十字架で愛し抜いた。だからいよいよ、わが愛に留まってくださいよ！」

ということを言っている。結論は、

「み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。」

この「暮らせよ」ということです。毎日毎日を、御霊を抱いてわが愛を受けて暮らせよということです。「生活しなさいよ」ということをここで小池辰雄は言ってくれている。

「み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ」

と。本当に毎日毎日こういうふうな生活で暮らしてほしいということですね。

「そしてその愛はまたおのずから隣人に流れてゆく。」

これは自ずから流れていく。

「私は愛しましょう」

と思ってやったら、これはしんどいですよ。おのずからなんですよ。これは神さまがやってくださることなんです。自分から愛そうなんて思ったら、とんでもないことですよ。

「おのずから隣人に流れてゆく」

んです。おのずから流れてゆく。

「そうでないならそれは聖霊の愛ではない。」

と書いてます。これはおのずからなんです。絶対に自分の力ではないということです。僕はいつも子どものことを言います。子どもが笑っていたら、それはもの凄く嬉しいでしょ。赤ちゃんが笑っていたら、親というものは本当に嬉しいですよ、大人は全部うれしい。そんなふうに、子どもの喜びは我々に伝わってくるでしょ。それと同じことを言っている。おのずから隣人に流れるということです。愛そうと思って愛するのではない。おのずからこれは成っていくということです。

「そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。」

これは燃え広がっていく、泉のように流れていくということです。小池辰雄は、

「法という字は水が流れ去るということだ」

と言いましたでしょ。

「自(おの)ずから成っていくというのが法なんです」

ということを言っている。キリストの愛とかいうのは本当に自(おの)ずからなんです。自分からでは出てこない、自ずからそれが成っていきますよ、ということをここで言っている。

これで終わりたいと思います。何かゴチャゴチャ言いましたけれども、僕の思いがちょっとだけでも伝わったらいいかと思います。